

没後150年 管弦楽法 “ベルリオース” 第3回
の大家

プログラム

今年没後150年の記念の年に当たフランスの大作作曲家ベルリオースを特集するシリーズも、今回の第3回で最終回です。

ベルリオースは1827年イギリスの劇団の主演女優ハリエット・スミソンと出会い、両親の反対を押し切って1833年に結婚。これが創作力を掻き立てる原動力となり、1830年には「幻想交響曲」を生み出し、交響曲「イタリアのハロルド」や劇的交響曲「ロメオとジュリエット」、「レクイエム」など次々と傑作を書き上げて行きますが、芸術的には成功しても経済的には苦しい日々が続きました。スミソンとの仲も次第に陰悪なものとなり、ついには別居生活を余儀無くされていきます。1842年からは国外演奏旅行を始め、メンデルスゾーンやシューマン、ワーグナーが演奏会に協力し、輝かしい成果をあげます。彼は1834年から評論を書き始めますが、1844年には「近代楽器法と管弦楽法」を出版、1848年頃からは「回想録」の執筆を始め、評論活動にも力を入れていきました。1851年から1855年までロンドンで定期的に指揮を行い、55年にはワーグナーに会いますが、互いに認めあいながも次第に遠ざかって行き、リストとの友情も以前ほどではなくなっていました。そんな中、1854年にスミソンを亡くし、1862年には再婚したマリーの死、1867年にスミソンとの子ルイの死と続く不幸な出来事が、彼の孤独感を一層深めていくのでした。1866年から1868年までリストの好意によって行ったオーストリア、ドイツ、ロシアへの演奏旅行が、最後の演奏旅行となりました。そしてベルリオースは1869年3月8日、波瀾と苦悩に満ちた一生を閉じたのでした。

ベルリオースは音楽史のなかで、特別な地位を占めています。それは「標題音楽」という新しい音楽ジャンルを生み出した事によりますが、その代表例が「幻想交響曲」です。各楽章は演劇に登場する人物と同じような性格を持ち、筋書きを説明するのに標題を必要とします。管弦楽だけで音楽劇を演じてしまうのです。こうして彼は管弦楽だけでは物足りない場合は合唱、独唱を加え、劇的效果を狙いました。伝統的な形式や枠を破った大胆な管弦楽法は、多くの作曲家に影響を与えています。

エクトル・ベルリオース (1803~1869):

歌劇“トロイ人(トロイアの人々)” 第4幕~ 王の狩と嵐

コリン・デイヴィス指揮バイエルン放送交響楽団/バイエルン放送合唱団
(1987.10.23 ミュンヘン、ガスタイクホールでのLive)

テ・テウム op.22

第1曲 テ・テウム(神よ、我ら御身をほめ)/第4曲 テイナーレ(主よ、この日)
第7曲 ユーテックス・クリテリス(われ信ず、審判に)

ポール・グローヴス(テノール)

小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

エルンスト・ゼンフ合唱団/ベルリン児童合唱団

(1997.11.6 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

葬送と勝利の大交響曲 op.15 ~ 第3楽章“昇天”

ジョン・プリッチャード指揮BBC交響楽団/BBCコーラス
(1982.8.11 ロンドン、ロイヤル・アルバートホールでのLive)

ハンガリー行進曲(ラコッツィ行進曲)(劇的物語“ファウストのごう罰” op.24から)

ヤン・クレンツ指揮ベルリン交響楽団

(1997.2.6 ベルリン・コンツェルトハウスでのLive)

*** 休憩 ***

エクトル・ベルリオース (1803~1869):

幻想交響曲 op.14a

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1987.3.1 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)